

令和元年9月期 学長記者懇談会

1. 日 時：令和元年9月25日（水） 15：00～16：00

2. 場 所：大学本部棟 2階 第二会議室

3. 懇談事項等

①全日本学生ラート競技選手権大会 2019 男子跳躍自由演技の部準優勝獲得までの軌跡

～コーチはAI～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料1

(説明者：北島栄司 (理工学研究科 博士前期課程1年次))

②日本バイオインフォマティクス学会 2019 年年会第8回生命医薬情報学連合大会での

優秀口頭発表賞獲得・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料1

(説明者：工学部工学科エネルギー環境工学コース 宮田龍太助教)

③第68回琉大祭について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料2

(説明者：井上理事)

④琉球大学同窓会 70周年記念事業寄附金贈呈式について・・・・・・・・資料3

(説明者：金城企画調整役)

⑤保護者向け VISIT CAMPUS・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料4

(説明者：グローバル教育支援機構アドミッション部門 副部門長 山田恭子准教授)

⑥琉球大学研究のクラウドファンディングについて・・・・・・・・資料5

(説明者：熱帯生物圏研究センター 松崎吾朗教授)

⑦琉大法科大学院の令和元年度司法試験結果等について・・・・・・・・資料6

(説明者：法務研究科長 清水一成教授)

⑧日本英語模擬国連への参加報告・・・・・・・・・・・・・・・・資料7

(説明者：グローバル教育支援機構大学教育支援部門

共通教育セクション長 ベアリー・キース教授)

4. 出席者：

西田学長、牛窪理事・副学長(地域・社会連携担当)、井上理事・副学長(教育・学生支援担当)、松崎吾朗教授(熱帯生物圏研究センター長)、清水一成教授(法務研究科長)、ベアリー・キース教授(グローバル教育支援機構大学教育支援部門 共通教育セクション長)、山田恭子准教授(グローバル教育支援機構アドミッション部門 副部門長)、盛山泰秀特命教授(グローバル教育支援機構)、宮田龍太助教(理学部)、北島栄司(理工学研究科 博士前期課程1年次)、宮城花南(法文学部3年次)、新里彪真(国際地域創造学部2年次)、宗本教育支援課長、岡崎学生支援課長、湧川入試課長、金城企画調整役

懇談事項関連資料

- ① 全日本学生ラート競技選手権大会 2019 男子跳躍自由演技の部準優勝獲得までの軌跡
～コーチはAI～

北島 栄司（宮田研 M1）

- ② 日本バイオインフォマティクス学会 2019 年年会第 8 回生命医薬情報学連合大会での
優秀口頭発表賞獲得

藤澤 孝太（宮田研 M1）

工学部宮田研
「AIによるデータからの未来予測および知識発見」

<p>Brain 神経活動から 動物の行動を予測</p>  <p>意思決定を司る神経細胞が発する信号を解釈します w/ 銅谷研(OIST)</p>	<p>Earth 気象観測から 災害の規模を予測</p>  <p>台風の勢力や進路を事前に知り、防災に貢献します w/ 伊藤・山田研(理学部)</p>	<p>② Genome 生命情報から 病気のリスクを予測</p>  <p>疾患関連因子を見つけ、オーダーメイド治療に役立てます w/ 池松研(沖縄高専)</p>
<p>Mind アプリ制作から やる気スイッチを発見</p>  <p>ゲームにハマる心理を探り、教育に還元します w/ 日熊・岡本研(教育学部)</p>	<p>① Sports 試合内容から 選手のくせを発見</p>  <p>人やボールの動きを捉え、上達のきっかけを掴みます w/ 佐藤研(沖縄高専)</p>	<p>Web インターネットから 流行のきざしを発見</p>  <p>観光・エンターテインメントの市場で最新トレンドを探ります w/ 神谷・當間・岡崎・遠藤研(工学部)</p>

図 1 : 宮田研のテーマとグループ。

① 全日本学生ラート競技選手権大会 2019 男子跳躍自由演技の部準優勝獲得までの軌跡
～コーチはAI～

② 北島 栄司（宮田研 M1）



図2：AI（Posenet）によるラート競技者の演技中の姿勢推定（2019/08/19 第一体育館）。
※ Posenetは動画像のみ（センサ等は不使用）からそこに映った人物の目鼻、肩や腰、膝の位置を推定（図中では青丸点として表示）するディープラーニング。この技術により、今まで感覚的に行っていた動作を具体的な数値として可視化できる。



図3：ラートインカレ2019（男子跳躍）で北島くんが獲得した銀メダルと賞状。



図4：ラートインカレ2019（男子跳躍）自由演技の部表彰式（2019/08/25 新潟大学）。
左が北島くん（準優勝）。



図5：北島くんラートインカレ2019（男子跳躍）準優勝報告会（2019/9/2 沖縄高専）。
左：佐藤 尚 准教授（沖縄高専・メディア情報工学科：本プロジェクト共同研究者。
元体操競技者で北島くんの演技指導を主に担当。AIにも精通）。
中央：北島 栄司（大学院理工学研究科宮田研 M1：研究主体者兼ラート競技者）。
右：宮田 龍太 助教（工学部・エネルギー環境工学コース：北島くんの指導教員。
本プロジェクトの構想とAI活用方法の指導を主に担当）。

② 日本バイオインフォマティクス学会 2019 年年会第 8 回生命医薬情報学連合大会での
優秀口頭発表賞獲得

藤澤 孝太 (宮田研 M1)

<<優秀口頭発表賞>>

- ・ O-2 Hiromitsu Shimoyama (Kitasato-university)
Study of Conformational Changes and Interactions of Calcium Ion Signal Transfer Protein Calmodulin and Calmodulin-binding Domain by Multi-scale and Multi-physics Simulation
- ・ O-7 Kota Fujisawa (University of the Ryukyus)
Selecting the genes related to breast cancer by combining the unsupervised machine learning and enrichment analysis
- ・ O-9 Atsushi Hijikata (Nagahama Institute of Bio-Science and Technology)
Drug Target Excavator: An Integrative Web Tool for Identifying New Potential Drug Targets
- ・ O-16 Shinya Suzuki (Tokyo Institute of Technology)
Replication dynamics analysis of microbes by whole genome sequence based on directional statistics

図 6 : 優秀口頭発表賞受賞者と発表タイトルのリスト (2019/09/14 大会 HP 掲載).

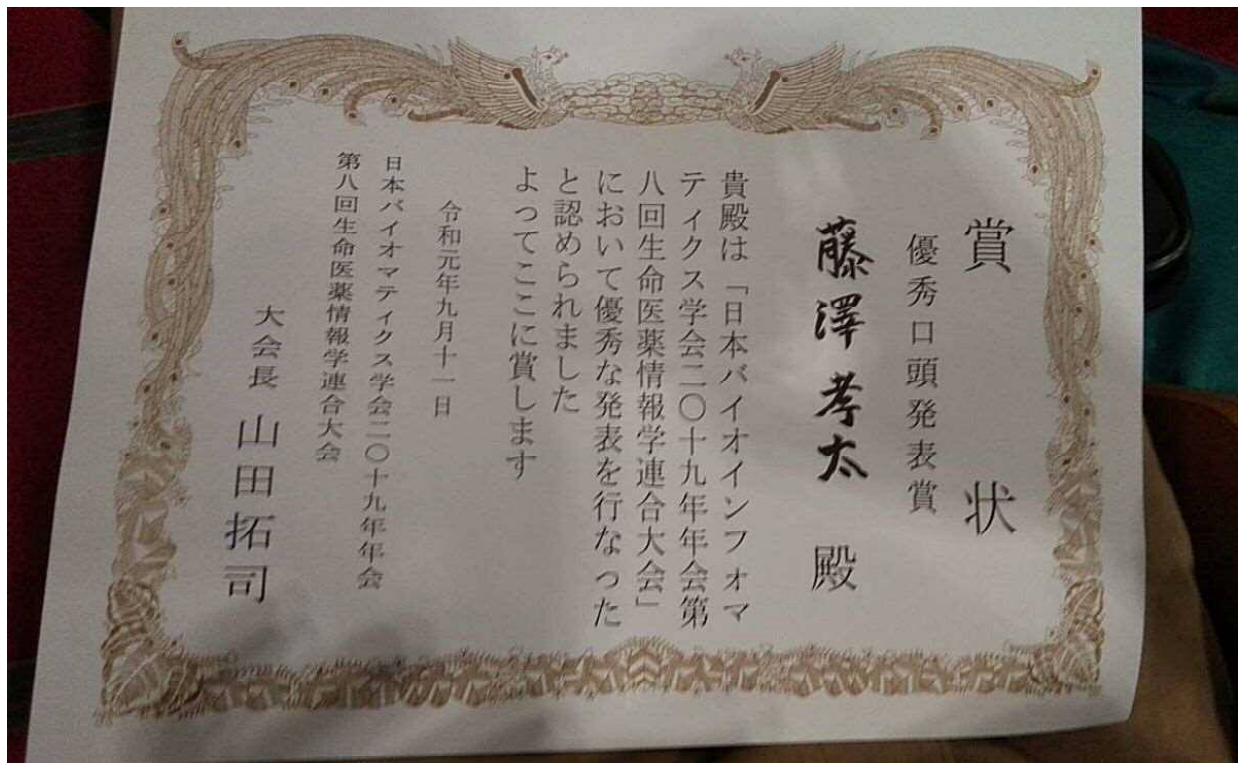


図 7 : 第 8 回生命医薬情報学連合大会で藤澤くんが獲得した賞状.

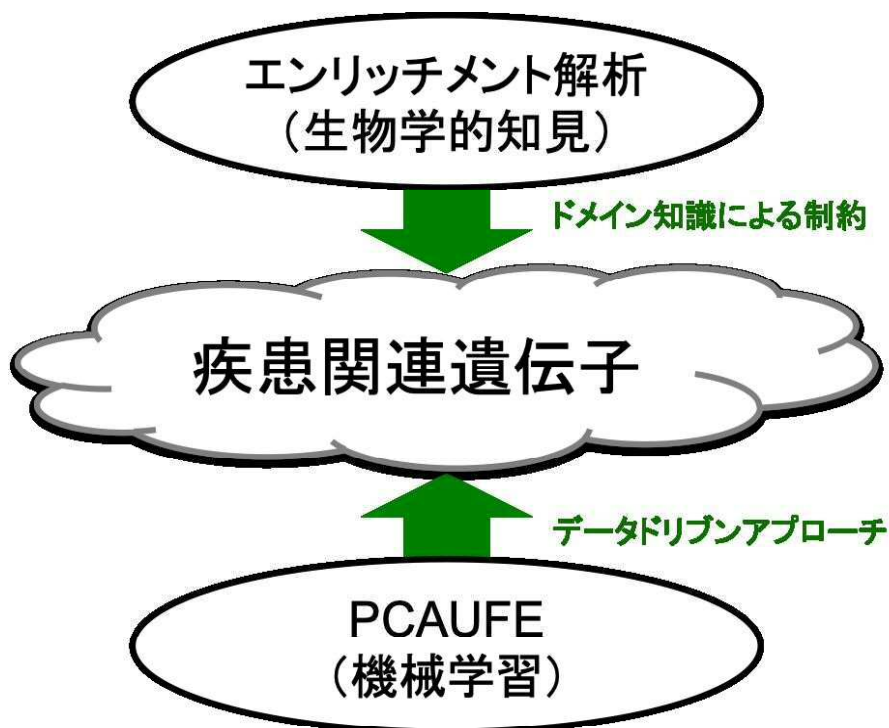


図 8 : 今回発表で提案した機械学習と生物学的知見を組み合わせる疾患関連遺伝子を特定するアプローチの概要 (Fujisawa et al., 2019).

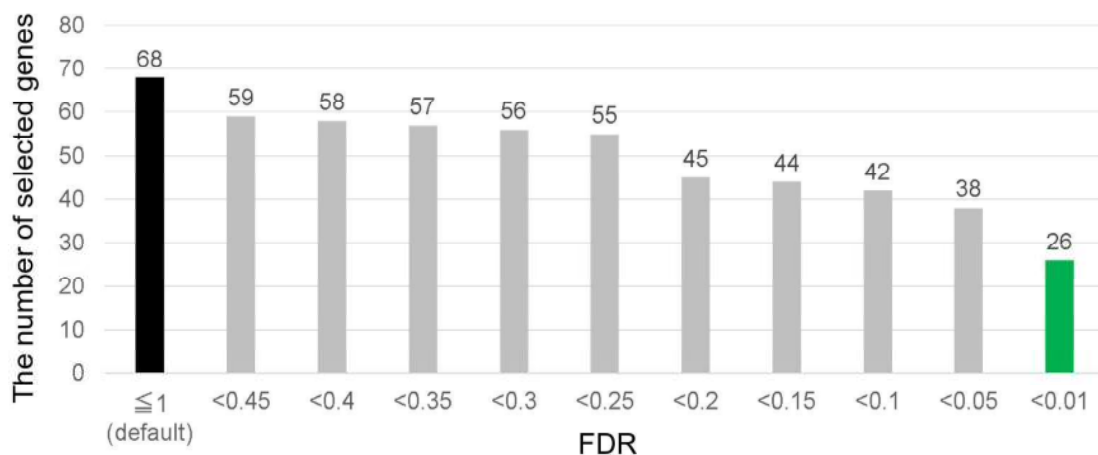


図 9 : 提案手法による疾患関連遺伝子の候補絞り込みの様子 (Fujisawa et al., 2019). FDR カットオフ値を厳しく設定 (図中 < 0.01) すると、機械学習しか用いなかった場合 (図中 default) の約 1/3 にまで絞り込むことが可能であることを示した.

「AIコーチ」で全国準V

ライトの動き分析、数値化

琉大大学院
北島 栄司さん

人工知能(AI)がスポーツのコーチに。8月24、25日に新潟大学で開かれた「第15回全日本学生ライト競技選手権大会」で、琉球大学大学院理工学研究科1年の北島栄司さん(23)が準優勝に輝いた。2年前に同競技を始めたという北島さんは今年3月、琉大工学部の宮田龍太助教と沖縄工業高等学校メディア情報工学科の佐藤尚准教授らと共に、AIを練習や演技に応用する共同研究を始めた。大会へ向けた実質的な練習期間は約1カ月間だったが、研究による指導が実を結んだ。

琉大・沖高専と共同研究



AIを使った技の研究で全国大会準優勝を果たした北島栄司さん(中央)と研究に携わった沖縄工業高等学校の佐藤尚准教授(左)、琉大の宮田龍太助教(右) 11月6日、琉球大学体育館

体操の派生競技である「ライト」はドイツ発祥のスポーツ。2分ほどある2本の鉄の輪を平行につないだ器具を用い、回転や跳躍で技を競う。北島さんが出場したのは跳躍種目で、回転するライトの上から半ひねりの技を成功させた。

体操部にも所属する北島さんだが、アルバイトとの両立などで練習時間が限られるため、独学での練習に限界を感じていた。そこで目をつけたのがAIによる動きの分析だ。3人の共同研究は、ひねり技をする際に、体の癖や関節の位置などをAIで分析することで可視化・数値化し、

減点されない演技や最適な練習法の考察、技の成功率を上げることを目的とした。分析に使ったのは昨年発表された「PoseNet」というシステムで、動画に写った人物の関節の位置を認識できるAIだ。タブレット端末やスマートフォンで動画だけでデータ収集が可能で、センサーなどを必要とした従来の手法より容易でコストも低い。

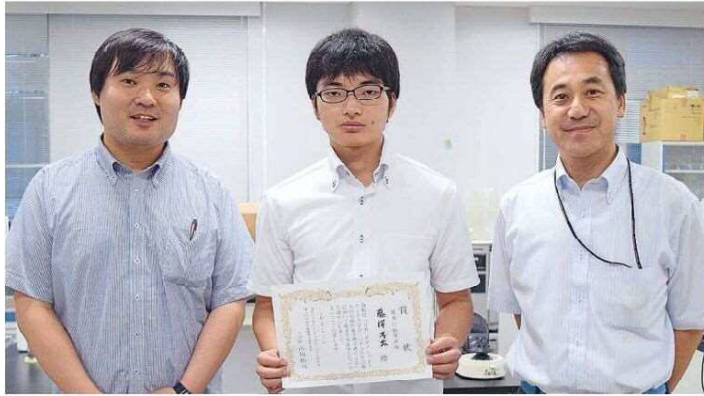
AIの環境に必要なシステムの構築や分析に関する指導は宮田助教が、演技からのデータ収集や分析は北島さん自らが、データサイエンスの研究者で器械体操の経験もある佐藤准教授が専門的な指導を担った。

研究と準優勝について北島さんは「練習に時間的な制約もある中でAIデータの存在は心強かった。良い結果が出せてうれしい」と語った。

宮田助教と佐藤准教授は「まだまだ発展途上の研究ではあるが基礎は出来上がりつつある」とした上で、研究の将来的な発展によるさまざまな可能性にも期待を膨らませた。

(下地陽南乃)

共同で研究した(左から)宮田龍太助教、藤澤孝太さん、池松真也教授



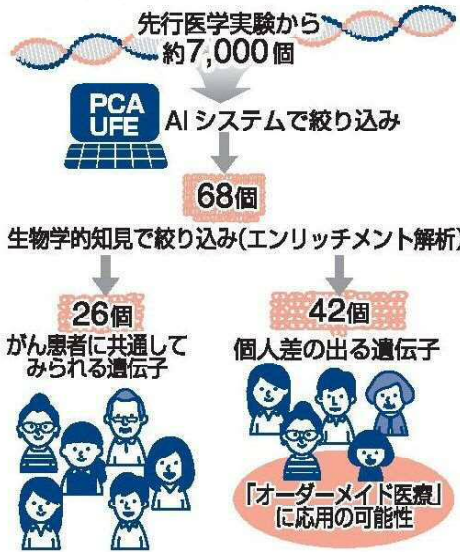
生命医薬情報学連合大会

琉球大学大学院理工学研究科1年の藤澤孝太さん(23)が、9~11日に東京工業大学で開催された「日本バイオインフォマティクス2019年大会第8回生命医薬情報学連合大会」で優秀賞に輝いた。藤澤さんが発表した研究は、AI(人工知能)分析と生物学的知見を組み合わせ乳がんに関連すると考えられていた遺伝子を絞り込み、「がん患者共通」と「患者個別」に

藤澤さん(琉大大学院)優秀賞

A I 用い乳がん遺伝子分類

がん関連遺伝子の特定研究イメージ



分類する手法。この手法で分類された個人差の出る遺伝子が、一人一人の体質にとって最も効果的な投薬や治療法を提案できる「オーダーメイド医療」実現の後押しになるとして高い評価を受けた。藤澤さんの研究は、まずAIのシステム「PCA UFE」を用いて、約7千個あると考えられていた乳がんを発現する遺伝子の候補を68個まで絞り込んだ。この結果に生物学的知見を重ねることで68個の遺伝子をさらに分類し、がん患者に共通する遺伝子26個と、患者の体質差で現れる42個に絞り込むことに成功した。

研究が進み、この個人差が現れる42個の遺伝子をより精密に特定できれば、患者個人の体質に合わせて最も効果を発揮する薬品や治療法を提供できるよつになる可能性を秘める。最近ではばく大な費用と時間を要する薬品開発でも、病気に関連する遺伝子の特定が創薬の効率化につながるとして製薬会社が熱い視線を注ぐ。藤澤さんは「専門的で難しいところも多かっただけに努力が報われてうれしい」と笑顔で話した。共同で研究し、AIシステムの分析指導を担った琉球大学工学部の宮田龍太助教と、生物学分野を指導した沖縄高専生物資源工学科の池松真也教授らも入賞を喜んだ。(下地陽南乃)

資料 2

令和元年 9 月 1 0 日
学 生 部

第 6 8 回琉大祭について

■ 第 6 8 回琉大祭

目的

- ・ 本学における教育の一環として、琉大生の日頃の正課教育及び課外活動の成果を発表するとともに、大学の諸施設を地域社会に公開し、大学と社会との緊密な連携を図る。
- ・ 琉大祭の実現を通じて、学科・サークルのまとまりをつくりだし、今後の学科・サークル活動の発展の糧とする。

スケジュール (予定)

9 月 2 8 日 (土) ・ 2 9 日 (日) 本祭典 (1 0 時 ~ 1 9 時 3 0 分)

※ 雨天決行。台風等で延期の場合は予備日 1 0 月 1 3 日 (日) 開催。

(参考) 昨年度 (平成 3 0 年度) 実績

参加団体数 : 屋内団体 4 5 団体
屋外団体 5 2 団体
野外ステージ団体 1 6 団体
来場者数 : 約 2 2, 0 0 0 人

とどろけ!

学生文化のシンフォニー

第68回

琉大祭

9/28±29日

10:00~19:30
琉球大学千原キャンパス



特別ゲスト: 5th Elements
9/29 17:30~



Constant Glowth

9/29 17:00~



Paraphrase

9/29 16:30~

〈企画内容〉

■実行委員会本部講演会

一たかまる戦争の危機

どうする辺野古・改憲・日米安保

講師: 米倉外昭さん(琉球新報社)

とき: 9月29日(日)13:30開場 14:00開会

ところ: 文系講義棟 新棟114

■展示・研究発表/模擬店など

■野外ステージ(入場無料) エイサー・ライブなど

無料

駐車場には限りがありますので、ご来場の際には公共交通機関をご利用ください。
酒販売・持ち込み禁止 第68回琉大祭実行委員会 TEL098-895-6050



琉大祭は地球温暖化対策に貢献するため、
カーボン・オフセットに取り組んでいます。

令和元年 9 月 20 日現在

琉球大学同窓会 開学 70 周年記念事業 寄附金贈呈式

- 日 時：令和元年 10 月 1 日（火） 14：00～14：45
- 場 所：琉球大学 大学本部棟 3 階 学長室
- 出席予定者：
 - （琉球大学同窓会） 幸喜琉球大学同窓会会長、副会長（2 名：調整中）
仲田事務局長
 - （琉球大学） 西田学長、牛窪理事、井上理事、福治理事、金城企画調整役

【概 要】

琉球大学は、1950 年（昭和 25 年）5 月 22 日に創設され、2020 年（令和 2 年）に創立 70 周年を迎える。

記念すべき節目にあたり実施する琉球大学開学 70 周年記念事業に対して、琉球大学同窓会から琉球大学へ寄附金の贈呈を行う。

【次 第】（司会：仲田同窓会事務局長）

1. 幸喜同窓会会長あいさつ
2. 寄附金受渡し
3. 西田琉球大学学長あいさつ
4. 歓談

（※マスコミ関係者の方については、歓談の前にご退席いただきます。）

琉球大学 保護者向け VISIT CAMPUS

令和元年 10月6日 (日) 11:00~16:00

11:00 (大学生協でランチ, キャンパス内散策), 13:00 (説明・相談等) があります。
ご希望, ご都合に合わせてご参加ください。
希望するスタート時間は事前に申請していただく必要はございません。
内容は下のスケジュール, モデルコースをご参照ください。

お申し込み: 事前申し込み制です。①もしくは②の方法にてお申し込みください。

- ①右の QR コードを読み取り, 必要事項を記入・送信してお申し込み
- ②琉球大学ホームページ→入試情報→【TOPIC】保護者向け VISIT CAMPUS から申し込みサイトに移動して, 必要事項を記入・送信してお申し込み



予定している内容 (詳細が決まり次第, 本学 HP に up いたします)

- 各学部の教員による学部説明と個別相談
- アドミッションセンター教職員による琉大の説明 (複数回実施予定)
- 学生生活, 入試の情報提供
- キャンパス散策 (受付でマップをお配りしますので, ご自由にご散策ください)
- 大学生協でランチ

場所 琉球大学千原キャンパス 文系講義棟 (受付) どちらの時間からご参加の場合も, 受付をしてください。

受付, 駐車場の地図はこちら→



スケジュール

- 11:00~13:00 受付, 大学生協でランチ, キャンパス内散策
- 13:00~16:00 各学部の教員による学部説明と個別相談, 琉大の説明, 学生生活・入試の情報提供
キャンパス内散策

モデルコース

1. 琉大満喫コース

- 11:00 文系講義棟にて受付, マップをもらう
- 11:30~ 大学生協にて学生と同じものをランチ, マップを持って大学内を散策
- 13:00~ 琉大全体や各学部の説明を聞いたり, 学生生活の情報収集をしたり。



2. 説明メインコース

- 12:30~13:00 文系講義棟にて受付
- 13:00~ 琉大全体や各学部の説明を聞いたり, 学生生活の情報収集をしたり,
マップを持って大学内を散策したり。



Instagram, Facebook にも最新情報を up いたします!



ryudai_admission



琉球大学
アドミッションセンター

お問い合わせ先 琉球大学アドミッションセンター
〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1
☎098-895-8018 ☒ aopost@acs.u-ryukyu.ac.jp



直接先生とお話できて
すごく進学への意欲が
高まりました

子どもとの会話の中で
大学の内容が出てこないのが
不安でしたが、解消されました

目的意識が明確となる内容だったので
子どもにとってもとてもよいと思いました

親としては地元も
しっかり検討したいので
よかった

目標が定まり、
努力する力になると思う

親子で参加することにより、
共通の情報が持てるのでよいと思います

入試のシステムや入学後のカリキュラムを
聞くことができてよかった

国立大学法人 琉球大学

保護者向け

VISIT CAMPUS

令和元年十月六日（日）11:00～16:00

琉球大学千原キャンパス 文系講義棟

普段見ることができない
大学を知ることができ、
よかったです

新しい大学の資料や冊子を
いろいろいただけよかったです

琉球大学へのイメージが変わり、
ぜひとも子どもを入れたいと思った

事前申込制です。

詳細、お申し込みはこちらから



イベントの詳細は
こちら

申し込みサイト

琉球大学 VISIT CAMPUS

search

琉球大学研究クラウドファンディング第1弾



琉球大学 × academist

UNIVERSITY OF THE RYUKYUS



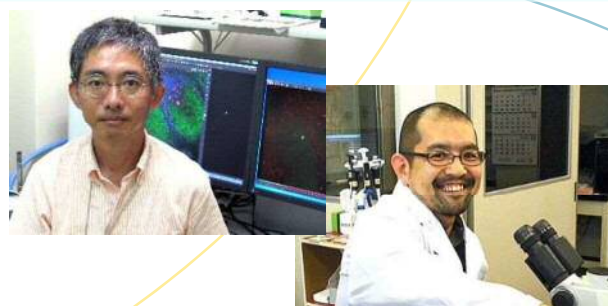
結核の新たな治療法として「免疫療法」を確立したい！

プロジェクト概要

世界3大感染症のひとつである結核。その病原体となる結核菌は、免疫細胞のひとつであるマクロファージの殺菌作用を抑える病原因子を作り出し、免疫応答を抑制することによって細胞内に寄生します。

松崎教授（病原細菌学）と高江洲准教授（分子生物学）によるそれぞれの強みを生かした研究チームは、この結核菌の病原因子の働きをブロックする方法を検討することで、まったく新しいタイプの結核に対する免疫療法への応用を目指しています。結核は抗菌薬による適切な治療を行えば治る疾患ですが、抗菌薬への耐性を獲得した多剤耐性結核菌が世界の一部地域で増加していることが問題となっています。

結核治療の進歩に大きく貢献する可能性がある今回のプロジェクトに、応援をよろしくお願ひします！



松崎吾朗、高江洲義一
熱帯生物圏研究センター 教授/准教授

目標金額 **75** 万円

[期間]

9/2(月)-10/30 (水)

19:00まで

詳細は下記をご覧ください。

<https://academist-cf.com/projects/144?lang=ja>



問い合わせ先：琉球大学 総合企画戦略部 研究推進課共同利用施設係
Tel: 098-895-8036 Mail:knkuodor@acs.u-ryukyu.ac.jp

2019.09.12 法務研究科長作成

琉大法科大学院の令和元年度司法試験結果等について

琉大は、受験者 34 人に対し**合格 5 人**であった（合格率 14.71%は法科大学院 73 校中 36 位）。昨年より合格者は 1 人増えたが、母数となる受験者が多かったため（8 人増）、合格率・順位はそれぞれやや後退した（昨年 15.38%・32 位）。開校以来 13 年回の試験で**累積合格者は 65 人**となった。

1. 全国の最終結果（別紙参照）

年度	受験者数	短答式合格者	短答式合格率	最終合格者	最終合格率
平成27年	8,016人	5,308人	66.2%	1,850人	23.1%
平成28年	6,899人	4,621人	66.9%	1,583人	22.9%
平成29年	5,967人	3,937人	65.9%	1,543人	25.9%
平成30年	5,238人	3,669人	70.0%	1,525人	29.1%
令和元年	4,466人	3,287人	73.6%	1,502人	33.63%

↓
 予備試験資格 315 人 81.1%
LS修了資格 1,187 人 29.09%

- ① 受験者数は、**またも最低**を更新（昨年より 772 人減）
- ② 最終合格者数は、政府公約の **1,500 人**を**かろうじて維持**（昨年より 18 人減）
- ③ その結果、**合格率は過去最高の 30% 台**となった。
- ④ 大規模有力校はほぼ上位安泰。最終合格率を超えたのは 12 校のみで、**61 校は平均値に達せず**、うち 43 校（琉大含む）は平均値の半分にも達しなかった。合格者 0 も 13 校あった。

2. 琉大の最終結果

(1) 概要

年度	受験者数	短答式合格者	短答式合格率	最終合格者	最終合格率	短答合格者に占める最終合格者の割合
平成19年	16人	14人	87.5%	7人	43.8%	50.0%
平成20年	24人	15人	62.5%	3人	12.5%	20.0%
平成21年	40人	21人	52.5%	4人	10.0%	19.0%
平成22年	38人	30人	78.9%	5人	13.2%	16.7%
平成23年	42人	26人	67.9%	7人	16.7%	26.9%
平成24年	42人	27人	64.3%	7人	16.7%	25.9%
平成25年	32人	20人	62.5%	6人	18.8%	30.0%
平成26年	26人	17人	65.4%	3人	11.5%	17.6%
平成27年	35人	23人	65.7%	6人	17.1%	26.0%
平成28年	33人	16人	42.1%	2人	6.1%	12.5%
平成29年	31人	18人	58.1%	6人	19.4%	33.3%
平成30年	26人	15人	57.7%	4人	15.4%	26.7%
令和元年	34人	17人	50.0%	5人	14.7%	29.4%

- ① 最終合格者 5 人は、平均的（ $65 \div 13 = 5$ ）だが、**LS 生合格者の減少の中では価値が高い**。
- ② 短答合格率がかつてに比べ明らかに悪くなってきている。
- ③ ただ、短答合格者が最終合格する率は、この数年、高止まりしている。
→ **短答式試験の合格率を上げることが急務**

(2) 合格者の属性等

期	氏名	出身	修了	
9	石川 路子 未修者コース	琉大法文国際言語学科	2016.3	県内出身。民間企業を経て社会人入学。英語が堪能でインターナショナルロイヤーコースを修了。
11	松井 香織 既修者コース	琉大法文国際言語学科	2018.3	島根県出身。未修コースで3期生として入学し、いったん修了したが、既修者として再入学。鎌倉フェローシップ受給歴あり。
12	伊江 優太 未修者コース	琉大法文総社（法学）	2019.3	県内出身。法学専攻から現役進学。
12	比嘉 天万呂 未修者コース	琉大法文総社（法学）	2019.3	県内出身。法学専攻から現役進学。
13	真栄里 嘉邦 未修者コース	明治大学法学部	2019.3	県内出身。いわゆるUターン受験。標準修業年限（3年）で修了し、1回目の試験で合格。

※インターナショナル・ロイヤー・コースとは、とくにグローバルな法曹養成を目指すカリキュラムで、外国法関連の科目やハワイ研修プログラム等を必修科目としている。

※鎌倉フェローシップとは、静岡の企業家・鎌倉国年氏による年額36万円×3年間の給付型奨学金。

- ① 県内出身は4人
- ② 学内進学者が4人
→ 今後とも学部との連携が重要であることを再確認
- ③ 再入学者が1人（同期にもう1人いたが、この方も昨年合格した）
→ 入学者確保のひとつの可能性
- ④ 未修者コース生が4人、しかも社会人・法律学以外の出身者が2人
→ 未修者教育をメインとする琉大LSの理念に沿う結果
- ⑤ インターナショナルロイヤーコース生が1人
→ グローカル法曹の養成という理念に沿う結果
- ⑥ 修了直後の合格者が3人
→ 修了認定レベルが適正（この点は慎重に確認を要する）

問い合わせ
琉球大学人文社会学部法科大学院係
TEL : 098-895-8091
E-mail : hbhkdak@acs.u-ryukyu.ac.jp

【琉大の学生・留学生が日本英語模擬国連大会（@近畿大学）に参加しました】

●日本英語模擬国連のねらい

日本英語模擬国連は近畿大学が主催しており、年に一度日本及び海外の高校、大学の学生が集まり、英語を主言語とした国連会議のシミュレーションを行う取組です。本取組では英語による国連の実践を通して①学生、教育者、企業間での国際的なネットワーク拡大②学生のアカデミック及び専門的なスキルの向上③参加学生の SDGs 理解の促進を主な目的としています。

●本取組のグローバル人材育成に関する位置づけ

本学ではグローバル人材育成の一環として、日本人学生と留学生が SDGs や国連のトピック等について英語で議論し、協働でプロジェクトを行うグローバル実践科目群が昨年度より開講され、それらを取りまとめるグローバル副専攻が本年度より提供開始されました。これらグローバル人材育成事業の一環として、本年度日本模擬国連大会に本学から学生（日本人学生 2 名、留学生 1 名）を派遣しました。

●本取組の URGCC における位置づけ

本学生派遣は、本学にて 21 世紀型市民を育成する URGCC 学習教育目標における「社会性」「地域・国際性」「コミュニケーション・スキル」「問題解決力」の力を養うものとして位置づけられます。

●日本英語模擬国連参加報告

去る 7 月 13 日（土）から 15 日（月）まで、大阪の近畿大学にて、日本英語模擬国連大会（以下 JEMUN）が開催されました。本大会では、世界から 22 カ国、42 大学、10 高校より 490 名の学生が参加し、共通言語を英語とした模擬国連が行われました。

本大会では、毎年国連が取り上げる様々なテーマについて学生が各国の代表としてディスカッションを行うのに加え、「ジャーナリスト」という会議を取材し、ビデオや雑誌等を編集、作成しレポートする役割があり、国連に関わる人の動きをよりリアルに経験することができます。

本学からは、宮城花南さん（法文学部 3 年生）、新里彪真（国際地域創造学部 2 年生）と、留学生の Alouny Senduangdeth さん（ラオス国立大学 2 年生）が、ビデオ取材班のジャーナリスト、マガジンジャーナリストとして参加しました。（詳細は記事の最後の URL からご覧下さい。）

参加学生の感想は以下の通りです。

"I highly recommend this program to those who are truly interested in finding new and challenging experiences. JEMUN is an amazing platform to perform the skills you have along with learning new things to improve your personal skills." -Niny

「特に、新しくチャレンジングな経験を求める人にこのプログラムをおすすめします。JEMUN は自身の持っている力を生かし、新しいことが学べるまたとない機会です。」

"I learned that the key is cooperation and mindset of helping each other, not competition especially when it comes to solving problems." -Hyoma

「問題解決において重要なのは、競争することではなく協力し合うこと、助け合いの発想を持つことだとこの大会を通して学ぶことが出来ました。」

"I have learned a lot of things through working on JEMUN assignments, other than learning English." -Hana

「JEMUN の課題に取り組む中で、英語を学ぶ以外に多くのことを学ぶことが出来ました。」

次回の JEMUN は 2020 年の 8 月 8 日～11 日に名古屋で開催される予定となっており、本学からも学生の募集・派遣を検討しています。琉大生の皆さん、来年度の JEMUN 派遣に向けて、英語を勉強し始めてみてはいかがでしょうか。

参加者における英語を使用したコミュニケーション能力、リサーチ能力、国際事情の理解、リーダーシップ、協働能力、クリティカルシンキング等の能力の向上をねらいとしています。

世界が直面する様々な課題を深く理解することを目指します。JEMUN では、世界中から集まった学生が世界各国の代表者となり、英語を使用言語とし、SDGs（国連が取り上げる課題）に関して各国の立場を取りつつ協議を進めます。このような活動を通して、英語によるコミュニケーション能力の向上、議論のために深く調査するリサーチ能力の向上と国際事情の理解促進、議論を通して決議案を作り上げていくリーダーシップや協働力の養成、さらに、建設的な意味での分析批判能力の向上が期待されます。

2019

No.1 magazine for JEMUN

JEMUN

At the Crossroads of Climate Change

WHAT WE DID

WHAT TO DO, WHAT
YOU CAN LEARN

about

200
participants

**WHERE
PEOPLE
COME FROM
AROUND THE
WORLD**

ALOUNY SENDUANGDETH, HANA MIYAGI, HYOMA SHINZATO

CONTENTS

Hot summer in Osaka, we five went to take part in JEMUN (Japanese English Model United Nations) as journalists and advisors.

We, the students were divided into video journalists (Miyagi, Senduangdeth) and magazine journalist (Shinzato). The editor would like to share what we saw and learned there with you readers.

03 Reflections on JEMUN

- 04 Alouny Senduangdeth's Reflection
- 05 Hyoma Shinzato's Reflection
- 06 Hana Miyagi's Reflection

08 The Places We Went

- 09 Where We Had the Conference
- 10 Night Out
- 11 Time to Sleep

12 The Videos We Made

14 Homepage of JEMUN





"MY FIRST MODEL UNITED NATIONS TAUGHT ME THE IMPORTANCE OF COOPERATION"

BY ALOUNY SENDUANGDETH
(left in the photograph)

This was my first Model of the United Nations so there were many things that I was introduced to especially with my job as a video journalist. One thing learned at JEMUN is that being a video journalist was not at all an easy job. I had a Japanese partner to help me and we had to make videos starting from planning to the final editing. From JEMUN I developed my skills in planning and creating a storyboard, editing videos and ideas for a content of a video. Since there were so many nationalities from around the world, for me, English was the only language I could use to communicate but that was not such a problem because most participants have a great level of English.

People around Us

JEMUN 2019 had many participants from all around the globe who care about the world. Surrounding with these people from a wide range of age gave me a happy working atmosphere. High school students were also active as we, university students, are. The people who participated in JEMUN were so energetic, friendly and kind. Advisors in the journalist room were patient with all of us. They were following us and our work closely until we upload the content. Most importantly was how they support us.



Although it was a tiring journey through JEMUN, I had a great time and they were all memorable moments. Everyone was so supportive even though there were a lot of people who did not know how to do their job. I believe everyone who were there didn't go back home empty handed. They all gained friendship, new skills and knowledge, experiences that for some people, might be a once in a lifetime opportunity. An extra benefit everyone gets is that you get to have a bit of time to see Osaka. It's not every day you get to travel to Osaka and meet great people that care for the world which is shown by how much effort they put in to participate in this conference. I highly recommend this program to those who are truly interested in finding new and challenging experiences. JEMUN is an amazing platform to perform the skills you have along with learning new things to improve your personal skills. If there is a chance that I could join JEMUN again, I would definitely participate!

"COOPERATION MUST BE
PRIORITIZED OVER COMPETITION"
BY HYOMA SHINZATO
(right in the photo)



What we, the magazine journalists went through was a little different than the ones of other journalists. Our duty was to collect all the assigned sources such as videos, cartoons, podcast audio files, photos, and articles into a magazine of each of us. As a magazine journalist, it was a little hard to wait for the sources to get ready to be out on any material by getting approved by the advisers. However, it being my first time to make a magazine, I acquired, though amateur skill to make an e-magazine using JOOMAG. (JOOMAG is an online site for making magazines.)

While collecting, editing, and putting sources on JOOMAG, we had to help each other figure out how to do it and not only that but we had to share the skills, information, and thoughts all the time. That experience developed my communication skill, sociability, and English, especially polite English. I personally tend to use friendly and/or rough English in daily life but I hadn't used formal and polite English so frequently before participating in JEMUN.



Felicitous Encounter

Making magazines was a little tough job but cooperating with the people around me had really pushed me forward to learn and go through. Even though it was only three days, we worked, talked, slept, ate, and hung out together. As we were not from the same countries or regions, we had some differences in communicating but we could get along with by telling about each other, understanding each

other, and exchanging thoughts. I learned that the key is cooperation and mindset of helping each other, not competition especially when it comes to solving problems.

We worked hard, played hard, and laughed hard.

My first experience in JEMUN was hard to stay, but so hard to leave.

That is exactly why I recommend JEMUN to other students too even knowing that it would make it more competitive. We can learn to ask people for help, work together, and open our minds to each other. My idea was to see if my career would include being a journalist and I felt like I would like to seek around my career a little more but I gained communication skill, skill to make a magazine, last but not least, encountering those people in Osaka.

Discover another oneself: Challenges in Osaka

My name is Hana Miyagi. I am a junior, majoring in English culture and literature. This year, I just transferred from another university because I want to have my own major and find my own specialties for future occupation. Then, I found the three-days JEMUN program in this April. It required to submit an essay about climate change to participate in the conference, so I thought that it is going to be a good opportunity to improve my writing skill and speaking skill. That is why I applied for this program. My first reason for JEMUN was that how do I improve English skill, but I have learned a lot of things through working on JEMUN assignments, other than learning English. Hence, I would like to talk about what I learned, the difficulties I experienced and why do I recommend to take part in JEMUN through the conference in this article.

Firstly, there are three main things which I have learned from JEMUN, be creative, corroboration and plans for the goal because participants should be required to submit some JEMUN tasks with partner or alone, it depends on your role. Therefore, if you join this conference, you should prepare a lots of stuff or organize each three days to work on the assignment. I actually took part in the conference as a video journalist, so my role was making a video about the meeting room I assigned to. There were 6 meeting room, and each room has different topic to discuss for three days. Delegates were people who discuss their own topic, so their role was gathering the information to have own opinion about the issue.



"THE CHALLENGES DID NOT KILL ME BUT MADE ME STRONGER"
BY HANA MIYAGI (LEFT IN THE PHOTO)

I think that this role is much harder than journalists because delegates required to have a deep understanding to solve the problem. My meeting room's topic was "The cooperation and Implementation of Earthquake Preparedness and Response Activities". The issue sounds rather simple, but in fact it is very difficult to solve. Interestingly, my meeting room was only the room which using LEGO to make a better community for our future well-being. Then, my partner and I were trying to make it clear when making a video because our role was need to convey the actual information for audience, and attracting their interest in our videos. It was the hardest things to make a video. It is because the journalists have to be creative as the media, so we had to think out the composition of video, and corroborate with other journalists for making a magazine in the end of the conference. Needless to say, we all had the deadlines so we planned to meet it. Therefore, planning was also needed to follow steps for the goal in JEMUN.

Secondly, I faced a lots of difficulties over three days because all tasks were my first ever experiences. For example, uploading a video on YouTube, using iMovie and interviewing a guest speaker. Especially, using a various app to make videos caused many technical problems, and I get confused about that all the times. Freezing laptop was usual, so the works could often not going well. Then, we reconsidered the process and thinking of alternative ways to get over these obstacles, for instance, using another laptop or searching about those problems on Google. However, it was very interesting experiences for me to get the technical knowledge because I seldom face laptop for quite a long time, so I think it is going to be a meaningful knowledge for me.

Additionally, I strongly faced the importance of the public speaking skill. When I interview a speaker, it took a time to select a better word for interviewing, so it also was a good opportunity to learn to speak polite English. Actually, I learned a lot from my partner who from Taiwan. She was very good at public speaking and she also was used to JEMUN because she belonged to the model united nation club in her university, so it was very supportive for me. When I nervous to speak English, she gave me some advises, and I was getting used to it little by little. Looking back at those difficulties, they were great memories for me. The reason why I think so is that I have never forgotten to have a positive attitude when I undertook difficult tasks, so I enjoyed these obstacles.

Lastly, I highly recommend you to participate in JEMUN if you want to have new skill and experiences, and I would like more students to know this program because it is so fun. More preparedness for JEMUN makes more fun when you join thus conference actually, it is my advice. I also have to mention about the exhaustion these past three days because the schedule was so tight as a good meaning, and the hotel we stayed at was recovered us. It was very comfortable and breakfast was so nice. On a different note, I met various people who make efforts to achieve the goal at JEMUN, so it was very motivated me to challenge my goal, and I want to say thank you to everyone I met there. Especially, my team member in Ryudai, I really appreciate to work together with me. I spent such a great experience than I expected. JEMUN was an unforgettable time for me. If you are at all interested, you should definitely join it.



Ryudai crews at the entrance of the ceremony room



**Places
we went
in Osaka**

1. KINKI UNIVERSITY



Kinki University's library has a café inside.

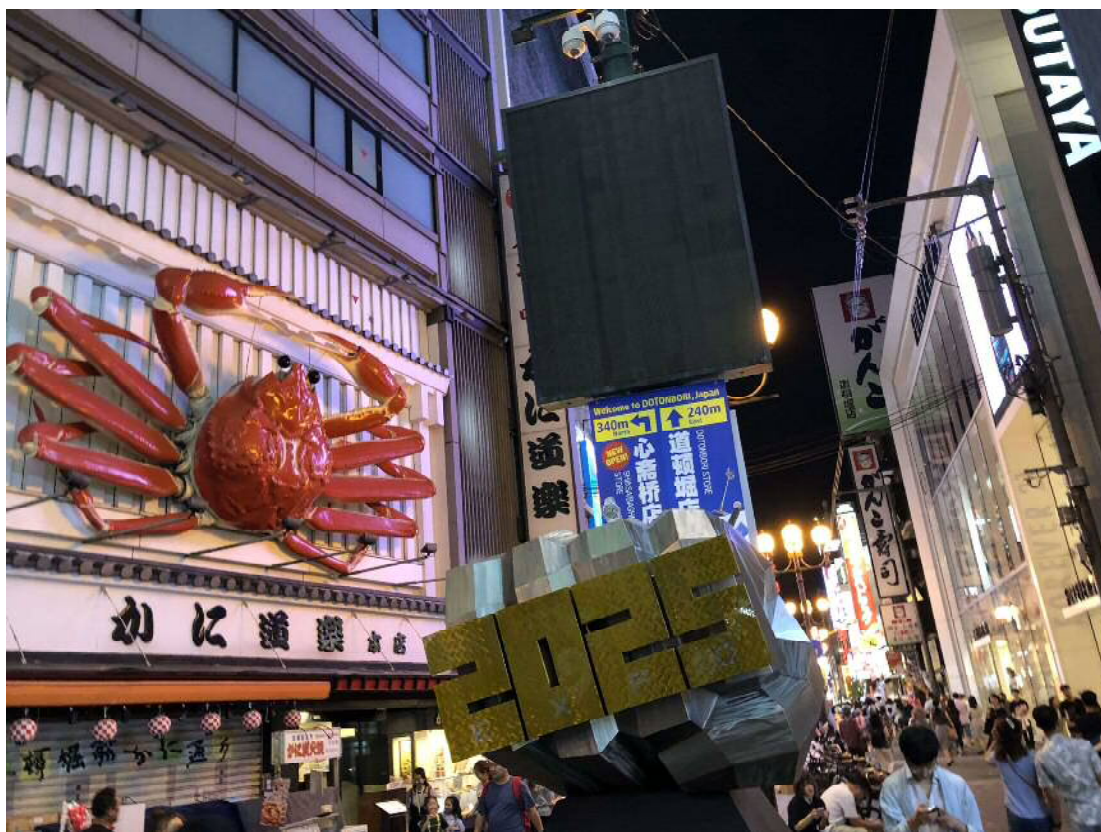
2. Dotombori



Us right in front of famous "Guriko"
This photo was taken by a tourist after we took his photograph.
Even the night out included another cross-cultural communication.



Takoyaki with the sight of
Dotombori river

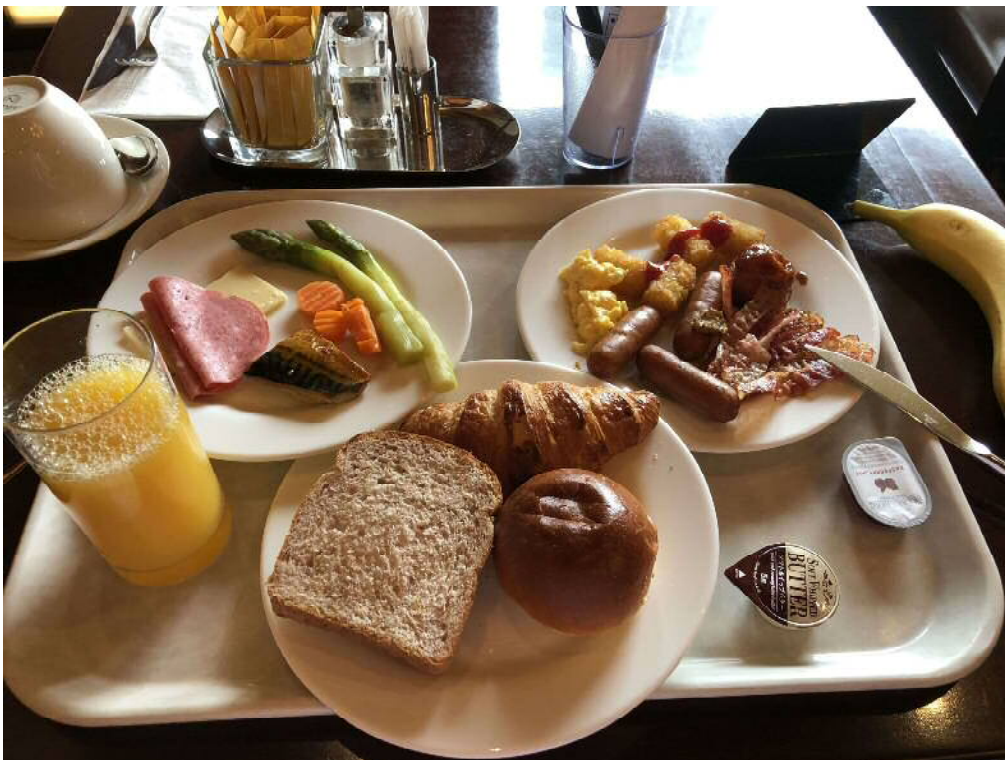


3. Sheraton Miyako Hotel Osaka



The last evening view from the hotel room

The room for the last night in Osaka



Buffet style breakfast

VIDEOS

We journalists were assigned into each conference room to report on it. Here are the videos that were assigned to make for our assigned room during the conference.



"Conference reflections from Philippines, Bangladesh, and Armenia"
- JEMUN Conference on YouTube

The delegates at the conference were to be the representatives of the assigned countries. This reflection video is featured with three delegates.

"About Dr. Linda Hornisberger and her career"
- JEMUN Conference on Youtube

Every room, including journalists' room, had invited speakers to know and think more about our career, the world, and this year's JEMUN theme, the climate change. She is a chief trainer in Swiss Disaster Dogs



"The JEMUN journalists' background"
- JEMUN Conference on YouTube

This video was taken in the journalists' room and is to show what some of them have acquired through the work as a journalist.



"Explaining your model: A look at one delegate's LEGO build"
- JEMUN Conference on YouTube

In meeting room #5, the delegates had a task to build up the imaginary society using LEGO blocks and to think and solve the problems and figure out how to do it practically as a leader of a country. This is one of the delegates' city.

"Why did the delegates choose to join the visually-enhanced meeting room?"
- JEMUN Conference on YouTube

This video contains the delegates' impressions on the conference and preparation for this meeting.



CLICK HERE
FOR MORE INFO ON JEMUN



